

平成30年度 事業報告書

連続講座

「プロフェッショナルに聞く！～

文化庁移転と文化芸術の未来～」

第7回 「ファッションー暮らしが育む装いの文化ー」

○実施日 平成30年12月3日

○会場 mumokuteki ホール

(京都市中京区寺町通蛸薬師上る式部町261 ヒューマンフォーラムビル3F)

○出演者

ゲスト；

石関 亮氏 (公益財団法人京都服飾文化研究財団学芸課課長, キュレーター)

熊谷 優希氏 (株式会社熊谷次取締役／京都観光おもてなし大使)

ファシリテーター；

平竹 耕三 (京都市文化芸術政策監)

第7回プロフェッショナルに聞く！ 文化庁移転と文化芸術の未来

平成30年度 文化庁京都移転の機運を醸成するための連続講座(第7回)
プロフェッショナルに聞く!〜文化庁移転と文化芸術の未来〜

ファッション暮らしが育む
装いの文化

この度、京都市では、文化庁の京都移転の機運を醸成していくため、連続講座「プロフェッショナルに聞く!〜文化庁移転と文化芸術の未来〜」を下記のとおり開催します。本事業は、文化庁の京都への全面的な移転を促し、その意義や効果について検証し、京都が引き受けるべき役割等を考える一環として、平成28年度から実施しています。今年度は、暮らしの文化の1つである食文化をテーマにしています。今回は、食文化の1つ「衣」にスポットを当て、装いの文化の調査研究や発信を行っている方がゲストに迎え、文化庁の京都移転を意義あるものにするよう、日本における文化政策の未来を探ります。

第7回講座

石関 亮 氏
(公益財団法人京都服飾文化研究財団学芸課長、キュレーター)

熊谷 優希 氏
(株式会社熊谷次取締役／京都観光おもてなし大使)

モデレーター 平竹 耕三 (京都市文化芸術政策監)

日時 平成30年12月3日(月)18:30〜20:30(満席 18:45)

場所 mumokuteki ホール 京都市中京区錦町3-1-1(ムモクテキホールビル内)
※観覧料無料(※) ※地下鉄錦線「京都府庁前」駅 徒歩10分
※地下鉄山科線「山科」駅 徒歩15分

18:30開場(※)※受付は、開場前15分より開始いたします。
※観覧料無料(※)※観覧料は、開場前15分より開始いたします。
※観覧料無料(※)※観覧料は、開場前15分より開始いたします。

TEL:075-661-3755
Fax:075-661-0555
※受付時間:18:00〜21:00
※観覧料無料(※)※観覧料は、開場前15分より開始いたします。

120th ANNIVERSARY
CITY OF KYOTO
京都府庁前駅
山科駅

平成 30 年 12 月 3 日 (月)

<ゲスト>

石関 亮 氏

(公益財団法人京都服飾文化研究財団学芸課長、キュレーター)

熊谷 優希 氏

(株式会社熊谷次取締役／
京都観光おもてなし大使)

<ファシリテーター>

平竹 耕三

(京都市文化芸術政策監)

平竹: 京都市の平竹でございます。本日は大勢お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。石関さん、熊谷さん、どうぞよろしくお願いいたします。文化庁が京都に移転するにあたりまして、文化芸術基本法の生活文化の中に食文化が加わるなど、国も制度を整えているところです。文化庁でも、生活文化はこれまであまり力を入れてこなかった分野なので、そこに力を入れていこうとされています。文化庁に来ていただく京都としては、文化庁が来られたらこういうことをやってほしいなとか、こういうことをやっていただいたら、これまでになく文化政策ができるのではないかと国の方の政策の進歩、進化を期待して、このような講座を開催しています。

本日のテーマは「ファッションー暮らしが育む装いの文化ー」です。ファッションということで、まずどんな服を着てきたらいいのかなというところから、大変悩みましたが、サラリーマンのファッションということで(笑)、スーツでやってまいりました。

先ほどご紹介がございましたが、本日のゲストは、お一人は公益財団法人京都服飾文化研究財団の石関亮様でございます。ファッションを学術的に研究されたり、展覧会の企画等をなさったりしておられます。もう一方の、すばらしいお着物姿で登壇いただきましたのは、株式会社熊谷次の熊谷優希様でございます。婚礼衣装の企画制作やプロデュースをされる傍ら、京都観光おもてなし大使としても活動しておられます。本日はファッションということをテーマに2人のゲストにお話を伺うことで、その魅力や、あるいはそれを政策の中でどういうふうに取り入れていけるのかを、皆様方と一緒に考えていきたいと思います。それでは、これから石関さん、熊谷さんとお呼びさせていただきますながら、進めてまいります。

まず、石関さん、自己紹介を兼ねて、どんな

ご活動をなさっておられるかお話しいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

石関: 皆さんこんばんは。京都服飾文化研究財団に所属しております、石関と申します。財団の名前に京都とあるので、皆さんによく和装の研究所と思われるのですが、実はファッションというもの、今の私たちが着ているもの、いわゆる現代服と、その源流である西洋の歴史的衣装を主な研究対象としています。実はこの財団、下着メーカーの株式会社ワコールが 100% 出資しているのですが、単に下着のみならず、その上に着る衣服、ファッションも含め幅広く研究をしているところです。そういった研究者の立場として、今回この場に立たせていただいているのかなと思っています。最初に財団がどんなことをやっているのかということをもう少し紹介しながら、私の自己紹介と代えさせていただきます。



京都服飾文化研究財団という名前は長いですよ。正式名称だと、ここに公益財団法人という堅苦しい単語が頭に付くので、さらに長い。ですので、英語名である、Kyoto Costume Institute の頭文字を取って、KCI と簡単に呼んでいます。

実は、今年 2018 年は、財団が設立 40 周年になります。つまり、40 年遡って 1978 年が財団の設立年となります。温故知新という言葉があるように、私たちの現代の服を考えるにあたっ

て、その源流である洋服の歴史を知ることが大切です。歴史をたどることによって、私たちの着る文化、西洋から借りてきている文化かもしれませんが、そうした文化がもう少し理解しやすくなる。日本だけではなく、私たちが着ている現代服は、世界中の共通のものになってきています。その服の歴史に対する理解を深めることによって、将来的に、どこに向かっていくのか。もちろん、「来年のトレンドはこれですよ」と細かく正確に言えないかもしれませんが、どういう方向に進んでいくのかを考えることができると思います。そういったことを知る機会になると思い、活動をしています。

具体的にはどのようなことをしているかというと、ひとつには、現物の衣服を集めています。古いものと、17 世紀、1600 年前後の資料ですね。つまり、400 年以上前の服から、最近のものとしては、現代の服、パリや東京でコレクション、ファッションショーとか行われて、デザイナーさんが発表したりするんですけども、そういった服まで集めています。また、ユニクロや ZARA のような、ファストファッションの服やストリートファッションも時には収集をしています。そうした収蔵品を調査したり、服飾史を研究したりする中で明らかになってきたことを、主には展覧会というかたちで、皆さんに伝える活動もしています。いくつか実例を紹介させていただきます。



「浪漫衣裳展」 1980 年

©京都服飾文化研究財団 広川泰士撮影

かなり古いものですが、これは1980年に開催しました「浪漫衣裳展」という展覧会です。19世紀のファッションを扱った展覧会で、岡崎にある京都国立近代美術館で開催しました。この美術館とは、定期的に一緒に活動しております。このあとご紹介する展覧会は、基本的には京都で最初に展覧会をして、その後、別の美術館に巡回しております。次の大規模な展覧会は1989年に開催した「華麗な革命」展です。18世紀、フランス革命という歴史的イベントが起こって、貴族社会から市民中心の社会に移り変わっていくのですが、その中でどう服装が変わっていくのかを紹介しています。18世紀の貴族たちの服装は例えば宮廷服は非常に豪華で装飾的だったのですが、フランス革命後になると、白を基調としたシンプルですっきりしたドレスが流行します。時代や社会が変わると、ファッションもがらっと変わることを皆さんには知ってもらいたいと思います。

次に、今日の話と深く関わりがあることですが、ファッションの源流は西洋にあると言いながら、実際にはその中に日本の着物の要素が結構取り入れられています。そこにフォーカスを当てた展覧会もしております。「モードのジャポニスム」という展覧会です。

また、現代のファッションは現代アート等とも深く関連しています。アートとファッションのつながりに関しては、「身体」というテーマで展覧会を行っています。また、衣服と切り離せない他の要素として、カラフルな色彩もあります。その「色」をテーマにした展覧会「COLORS ファッションと色彩」ですとか、ファッションにおける「着飾る」という行為のぜいたくさを取り上げた展覧会「ラグジュアリー：ファッションの欲望」といったものを開催しました。京都で行った最新の展覧会は2014年の「Future Beauty 日本ファッション」展です。20世紀後半、日本は戦後の洋装化を経てファッション・

デザイナーが次々と登場し、世界で活躍するようになりますが、そうした日本のデザイナーたちを紹介しながら、彼らが日本という文化的土壌からどのような影響を受けて、また世界に影響を与えたのかということを見てもらう展覧会でした。このように展覧会では、単にトレンドを紹介するのではなくて、服が歴史の中でどのように育まれていって、それが日本や西洋というひとつの場所やファッションという一領域にとどまらず、いろんなところへ移り伝わっていく様子を皆さんにお見せしながら、一緒に考えていければと思っています。



「COLORS ファッションと色彩」展 2004年
©京都服飾文化研究財団 畠山直哉撮影

実は来年2019年も、京都国立近代美術館で展覧会を行う予定ですので、是非とも来ていただけるとありがたいです。紹介をこのぐらいにして、今回のテーマについて、お話ししたいと思います。

「装いの文化」というテーマでお話をいただいたんですけども、まずは「装いとは文化なのか」という問いを立てて考え直そうと思います。ただ、私自身、服を研究している立場でもあるので、「装いは文化である」と、もちろんかたくなに信じています。おそらく会場に来られている皆さんも、装いと文化の関連について興味を持っておられて、来られていると思うので、装いは文化じゃないと思っていらっしゃる方は、まずいないと思います。ですが、再確認という意味も含めて、「文化」はそもそも辞

書でどう定義されているかと調べてみました。

「広辞苑」第6版の記述です。まず、「culture」という英語と同義であることが示されて、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」と続きます。その次の一文が、「衣食住をはじめ」という言葉で始まっているんです。「文化なのか」という私の問い自体が愚かしい。「衣食住は文化でしょ」とごく当たり前のことを言うように定義は始まっています。これで安心して「装いの文化」について話を進めていきます。

そうすると非常に残念なのは、文化庁のお話になりますけれども、「衣食住」について、今まで文化庁はほとんど何もしてこなかったという事実です。「衣食住はじめ」って言うくらい文化として衣服を考えるのは当たり前なのだから、文化行政をつかさどる文化庁としては、最初から、何かしら衣服に対する活動をしてよ、という思いが募ります。

装いは文化であることがわかりました。では、そこから広げて、「ファッションって文化なのか」ということを考えたいと思います。「ファッション」は流行という訳語からもイメージされるように、何かしら一過性のもので、例えばファッション・デザイナーやファッション雑誌やテレビ、ネットで流行りが作られて、それを追いかけるか無視するかする上っ面なものだろうと。「ファッションなんて、文化っていうほどじゃないよ」と思われる方もいらっしゃると思います。確かに一過性のトレンドはたくさんありますが、例えば10年、50年、100年といったスパンで変わっていく装いについて考えると、それは単なる一過性のものではなくて、やはり私たちが少しずつ育んでいるものです。そういった意味で、ファッションもひとつの文化だろうと思います。

もう少しお時間をいただきつつ、文化である例をお話しさせていただければと思います。

皆さんにはいろいろな形のマネキンをご覧ください。



展示用マネキン 京都服飾文化研究財団所蔵

私たちが過去の時代の衣装を展示するとき、に使うマネキンの原型で、どの時代のものかによって使うマネキンがほぼ決まります。左から、18世紀、19世紀初頭、19世紀中頃、20世紀初頭、1920年代と並んでいて、一番右は現代のマネキンです。左から四つのマネキンは、私たちが収蔵している現物の衣服のサイズやシルエットから逆算して作ったものです。ウエストの形、バストの位置、ヒップの高さとかが時代によって変化している様子がお分かりいただけたと思います。その時代のある意味では理想的な身体に近いと思ってください。つまり、理想的なボディラインは実のところ時代とともに変わってきているということです。これは決して特定のファッション雑誌だとか、デザイナー個人で決められてしまうものではありません。いろんな要素が組み合わさって、着る人も参加しながら作り上げていった形と考えてください。

18世紀ヨーロッパの貴族の衣装には、非常に華やかなものが多いです。中には、頭に船を載せるといった奇抜な装いも流行りました。そうしたドレスの下に何を着ているかというと、コルセットです。コルセットが胸の高さや、ウエストの形、ヒップの盛り上がりを作っていきます。そして、その上にドレスを着るというのが、西洋の服装の長い伝統です。



ドレス 1780 年頃
京都服飾文化研究財団所蔵 小暮徹撮影

19 世紀中頃になると、スカートが大きく張り出します。そのスカートのフォルムを作るのが「クリノリン」という、ある種の補正下着です。現在でも、ウェディングドレスなどでまだまだこういったスタイルが人気ですね。150 年前のドレスのスタイルにみんなまだ憧れを抱いているということが言えます。



クリノリン 1865 年頃 畠山崇撮影

少し時代が下がると、「バサスル・スタイル」と言っても、これもウェディングドレスで人気ですが、「バサスル」という名のヒップパッドでお尻を大きく張り出したように形を作るものです。西洋の服の作り方はまずコルセットやバサスルといった下着で形を整えて、その上から体にフィットさせるように服を作っていきます。

コルセットは長く西洋で用いられた下着です。19 世紀になると、今の下着のように鮮やかな色や、華やかなレースの装飾が施されるようになります。この時期ウエストを極端に細く絞ったスタイルが流行しますが、そのシルエットを作り出しているのがコルセットです。ウエストを締めるときつく苦しくなることは、想像していただけたと思います。子供の頃からずっと着けているので慣れている部分もあるでしょうが、やはり骨の形が変わったり、内臓の位置や形が少しいびつになったりしていたようです。細くしたいという欲求が高まるのと同時に、健康被害や生活に支障が出るのが問題となって、コルセットが使われなくなってきます。

そのあと登場するのが、ブラジャーです。1925 年ぐらいになってくると、ようやく私たちがある程度見慣れているようなスタイルになってきます。現代服のスタイルに近いものもこの頃登場します。

今の私たちの服の原型は 100 年前ぐらいに出てきたわけです。でも、その前にコルセットというものがあって、それを改良したり、置き換えたり、また改良したりと繰り返しながら今の下着や服の形が生まれています。踏み込んで言えば、コルセットがなければ、私たちの現代のスタイルは生まれず、違う形の衣服が出てきた可能性が大いにあると思うのです。

もう少し違う側面でファッションと文化の関わりについてお話します。西洋の衣服にどのように東洋、あるいは日本の文化が入っていったか、ということです。19 世紀の後半、欧米では日本の文化が熱狂的にもてはやされた時期がありました。「ジャポニスム」という言葉をお聞きになった方も多いかなと思います。もともとは美術用語で、例えば浮世絵の構図や色彩の感覚が、モネ、ルノワール、ゴッホなどの、印象派の画家を中心とする西洋絵画の美意識に影響を与えたことを指します。それだけでな

く、ホイッスラーなどの当時の風俗を描く画家たちの作品を見ると、西洋人が着物を着て、日本風の屏風や椅子、浮世絵に囲まれているシーンがしばしば登場します。

このように当時、工芸品も含めて、日本のいろいろな文化が海外に行って、西洋ではそれを非常に珍重する、評価する動きがありました。その頃の日本文化の熱みたいなのを広く「ジャポニスム」と捉えたら、服も同じことが言えると思います、KCI では「モードのジャポニスム」という展覧会を企画しました。19 世紀後半、実際に着物の生地を使って、当時の流行のスタイルに作り変えられたドレスがありますし、着物に使われる花鳥のモチーフ、例えばカキツバタ、竹、ツバメといったものがドレスの柄に取り入れられています。着物風の服が西洋で作られて、室内着として用いられたり、帯や袖、襟の打ち合わせといった着物に特徴的なデザインをドレスに流用したり、自分たちの文化の中にどんどん取り入れていこうとする流れがありました。

また、着物は平面的な衣服で、立体的な人体に合わせて裁断、縫製する西洋の伝統的な服作りの形とは異なっています。20 世紀に入ると、ドレスの形は徐々にシンプルに平面的になります。多分、この辺にも着物の影響が強く出ているのではないかと考えています。

同時期に日本でも、西洋に輸出するために室内着やコートを製造していた事実があります。洋装の流れを受けて、日本人自身が、日本的なものをどう洋服の中に取り入れるかを試行する流れも出てきます。

服を文化の視点で考えるというのは、誰かひとりが成し遂げたという話ではなくて、大きな流れの中でいろんな方々が関わって行って、長い年月をかけて服の形や着こなし方などの進化につながっていく、そうした様子を捉えていくことが大切だと思います。

装いとは、最初に申し上げたとおり「文化」です。服を着る私たち自身が育んでいく文化だろうと考えています。ですので、ファッションは一部の人がやっているもので、それに興味のない私には無関係だと考えるのではなく、「着る」という行為自体が、いろいろな歴史的な積み重ねを経て今の私たちの生活に組み込まれているわけですから、他人事ではなくて自分ごととして捉えていただきたいということを、願ひも込めて、まとめとさせていただきます。

装いとは？

服を着る私たちが育む文化

平竹：どうもありがとうございました。

ただいまのプレゼンでは、KCI のご活動とか展覧会のお話ですとか、あるいは着物がどのような形で洋装に影響を与えていったか、あるいは取り入れていかれたか、パリのモードの中などに入っていたかというお話をさせていただきました。

そう考えますと、「装う」ということが文化だというのはよくわかるのですが、何となく「ファッション」というと、今紹介されたものも結構ハイレベルの人たちのものかなと思います。「ファッション」を生活文化と捉えたとしたら、どのように考えたらいいでしょうか。

石関：ファッションを、1 年ごと、半期ごとに変わっていく流行だと考えると、やはり生活との密着度は薄れてしまうと思います。

一つは、先ほど申し上げたように、10 年、20 年という流れでどう変わっていくかを考える方が、自分ごとに近くなるのかなと思います。

もう一つは、皆さんが持つハイファッションのイメージに関わることです。例えば、パリコレ、パリで開催されるファッションショーというと、奇抜な服や、実際着られるのか分からないアートな服が発表されている、と想像される方が多いと思います。そうだとすれば、実際私たちのところにどれだけ下りてきているのか疑問に思うことは当然です。ただ、そこは地続きの部分が存在します。ファッションショーはインパクトが重要な面もあるので驚くようなデザインの服や豪華なドレスが数多く登場します。でも、その中には着こなしや色、デザインの提案が、少しずつですけれど、含まれています。それを雑誌などのメディアの記者やスタイリストが、「今回のトレンドは水玉模様です」とか、「スカートが長い丈がはやります」という編集をして紹介します。また、ファストファッションのブランドのような、私たちに身近なファッションメーカーも、有名なブランドのファッションショーを見て、何が流行りそうか分析しています。例えば、白い服がはやりそうだったら白を基調としたデザインをいつもより多く作ったり、このデザインの襟が流行りそうと思ったら、それに近い形の襟を付けたシャツを作ったりしています。そういうふうにどんどん私たちの着るレベルに浸透していきます。

平竹：ありがとうございます。そのようにご説明いただくと、何となく我々の問題だということがよくわかりました。

また、このような分野を研究されている方は、あまりいらっしゃらないと思いますが、ファッション、服飾を研究しようと思われた動機は、何かございますか。

石関：先ほど紹介していただいたように、私は、京都大学で勉強していました。私の学部は、理

系も文系もあって結構何でも研究やっていいよという学部でして、研究対象を選ぶときに、何か人とは違うことやってみたいと思ったんです。ちょうど私が学部生だった1990年代は、ファッションを研究するのが新しく、面白いと言われていた時代です。例えば、今、京都市立芸術大学の学長である鷺田清一さんとか、哲学者という立場で、ファッションやファッション・デザイナーのことを語っていて、そうした流れを非常に興味深く見ていました。

また、所属した学科の講座がフランス文化・社会ということもあって、フランス文化の中でファッションを研究するのが面白いかなと考えたことが最初のきっかけです。

平竹：どうもありがとうございます。楽しそうなお研究だと思います。ありがとうございます。

それでは、後ほどまたお話を伺うとしまして、次に熊谷さん、ご発表のほうよろしくお願いたします。

熊谷：皆様はじめまして、こんばんは、熊谷優希と申します。私のことを知っていただいている方もおられるかと思いますが、知らない方がほとんどだと思いますので、簡単に自己紹介を兼ねてお話ししていきたいと思います。



同志社女子大学の学芸学部情報メディア学科の在学中のときのゼミの先生が元テレビ局のプロデューサーだったのですが、その先生が、いろんなこと、今しかできないことにチャレンジしようという方針でした。私は昔からお茶とかお花とか、書道とか、どちらかというと洋のものより和のものが好きだったので、当時は「きものの女王」という名前でしたが、「ミスきもの」コンテストにチャレンジしました。コンテストの会場に行ったとき、参加者がプロのような方や、マネジャーをつけて来ている方とか、常にずっと控えのところで鏡をずっと見ている方ばかりでした。私は、「ああ、私終わったな。何でこんなところ、来たんやろう」という不安と焦りしかなかったですね。

私がコンテストを受けたときが19歳で、自分の振袖をまだ持ってなかったのが、母の振袖を着て出場しました。1人30秒のスピーチの場がありましたが、私は周りを見渡して、皆みたいに完成された美しさ、見栄えもなく不安でした。ですからそのときの着物への思いについてスピーチしました。私は母の振袖を着て、祖母の帯を締めて、会ったこともない曾祖母の帯締めを締めていましたので、「着物というものは、会ったこともない曾祖母のものを代々受け継いで着たり、締めたりできる。その裏側には、会ったこともない人の思いや、母から子へのストーリーや思いが着物には込められているんですよ」ということをお話ししました。コンテストの発表を待つときは、もう無理だと思っていましたが、自分の番号が呼ばれたときは、本当にびっくりして、そのあとのスピーチでは感動して涙が出てまともに話せませんでした。

後日、審査員の方とお話しする機会があったので、なぜ受かったのかということを知りました。「あなたはすごくスピーチがよかった。見た目がどうこうよりも、まず着物への思いがこもったスピーチがすごくよかった。コンテスト

では、今完成している人を選ぶのではなくて、これからどんどん磨きがかかる方を選んだので」ということをおっしゃっていただきました。それからの20歳の1年間、いろいろ着物を着て、着物振興の活動をしました。

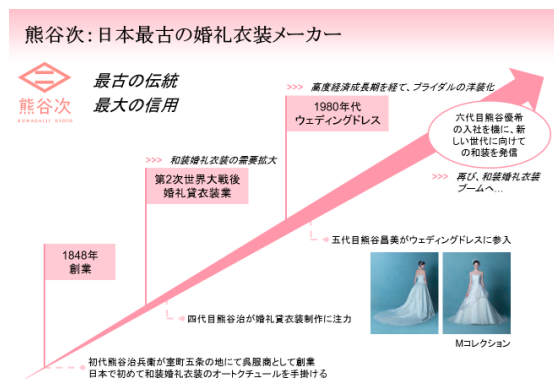


私は、ずっと京都生まれの京都市育ちで、京都が大好きなので、大学を卒業した後も京都の企業で働きたいと思い、地元の銀行で働きました。それだけでは少し堅いな、もっとほかのことも学びたいと思い、同じく京都を地盤とする企画とかコンサルの会社で働きました。そして、やっぱり企業で働くのもいいけど、もっといろいろ勉強したいっていう思いもあったので、働きながら、同志社大学大学院ビジネス研究科に通い、京都の伝統産業から和をベースにした文化ビジネスへの展開を学びました。

いろんな経験などを重ね、20歳代後半になり、年齢的にも家業の仕事に携わろうという年にもなり、実家の家業に入りました。また、様々な活動を通じて、着物をベースとして各方面からオファーをいただいています。映画の「古都」のプロデュースや京都市の観光おもてなし大使など、仕事の幅を広げながら活動しています。

今の活動の原点は、やはり、大学のときに「ソウゾウ力」を身につけよ。」という学部のモットー、教えにあると思います。「ソウゾウ」とは、イメージの「想像」とクリエイティブの「創造」の両方のことで、今、自分に何が求められているかをイメージの「想像」をして、そしてその後、自分で考えて行動するからこそ、

次のステップのクリエイティブのほうの「創造」が生まれるということです。



次に、私の家業、熊谷次とはどんな会社をお話したいと思います。

株式会社熊谷次という会社は、1848年に初代熊谷治兵衛という者が室町五条の地に、呉服商として創業したのが始まりです。そして、日本で初めての和装の婚礼衣装のオートクチュールを手がけました。第二次世界大戦後、ものがない時代に、日本では婚礼衣装のレンタルというのが出始めました。和装より洋装が増える時代でしたが、婚礼の中ではまだまだ和装の需要が多い時代でした。1980年代、衣服が和装から洋装に変わってきた時代には、ウェディングドレスというものが世の中に出てきました。4代目である私の祖父の熊谷治が、5代目の私の母の熊谷昌美に対して、「これからは女性が社会進出する時代だから、女性もやはり手に職を持って働く時代が来る。何か手に職を持って働いたほうがいい」とアドバイスをしたそうです。そこで母は、婚礼の在り方が和装から洋装に変わってきている時代だということに着目して、ゼロの状態、もしくはマイナスの状態から、ウェディングドレスの研究や勉強をして、ウェディングドレスに参入しました。ありがたいことに、和装の婚礼衣装も洋装の婚礼の衣装も、お客様、お客様から信用を得ることができました。弊社のモットーとしている「最古の伝統、最大の信用」、この言葉の経営理念のとおり、お客様からの信用があってこそ今日の170年、

会社が続いています。

そして、今から約10年前ですが、私が弊社に入社した時のことです。入社したからには、何か新しい風を吹かして、新しいことをしたいと思っていました。当時は、周りのお友達が結婚式の第1次ブームのときでした。いろいろ話を聞いてみると、「着物には、あまり着たいのがないんや」といった声が多かったので、それならば自分たちの世代が着たいと思うものを作ってみてはどうかと思い、和装の婚礼衣装、着物のプロデュースを始めました。ウェディングドレスを着る方のほうが多いので、これをきっかけに、もう一度和装の婚礼衣装のブームを巻き起こせたらなという思いでした。

それと同時に、世の中が少子化と言われ、また結婚式を挙げない方や、結婚式の当日はドレスしか着ない方が増えてきました。それでは残念ですから、写真だけでも残してもらおう、和装を着てもらいたいという思いから、写真スタジオも私の代で始めました。

着物プロデュース: 大胆な発想で新しい着物をデザイン



熊谷次
KUMAGAIJI
KOTO JAPAN
COLLECTION
by Kumagaiji

私が着物を好きになって、着物と携わるようになったもとのきっかけは、大学時代、19歳のときに受けた、「きものの女王」の活動です。海外のVIPの方や、京都でイベントのPR、おもてなし、花束贈呈といったところできものの振興をさせていただきました。海外の方をはじめ、年齢層の高い方やそういう方に限らずに言えることですが、着物を着て皆さんの前に出るとみんなの顔から笑顔が見えて、喜んでら

えるのがすごく嬉しいです。着物の持つパワーは、人を楽しませて喜ばすこと。これこそ「着物を着れば人気者」という、私がちょっと作った駄じゃれ言葉につながるなと思いました。

次に、実家の家業に入って、私はどんな着物をプロデュースしたのかお話します。「大胆な発想で着物をデザイン」ということで、これまでにないタイプの着物のプロデュースをしました。先ほども申しましたが、周りは結婚の第1次ブームでした。でも、「着物着たいけど、着たいもんがないんや」とか、「文金高島田はちょっと嫌やわ。かぶらかぶんの嫌やし、和装はやめとこう」という声が多かったので、これまでにないタイプを作ろうという企画を立ち上げました。あえて、これまで着物を作ってきたデザイナーの方と一緒にお仕事をするのではなく、全くこれまで着物を作ったこともない方やデザイナーの方、コピーライターの方を探してきて、チームを組んで、着物のプロデュースをしました。



これまでにない点ですけど、一つ一つの着物に、「着物言葉」とお名前を付けたんですね。デザインに関しては一見、現代風に見えますが、きっちり古典の要素は忘れず、外さず入れて、今の人に合うデザインや色遣いにして作っています。

今この画面に出ている着物は、「金花宴」というものです。左下に出ている、菱に二のマークが弊社のロゴマークをもとに、菱形を展開し

て、コレクションのテーマをお花にしました。この金花宴は弊社のアイコン柄にしています。

では、具体的に、どんな引き振袖をプロデュースしたのか。先ほども申しましたが、全部の着物にはお名前と、「着物言葉」が付いています。一つ一つ簡単に説明していきます。

この左上のカラーの着物ですが、これはカラー、つまりミズバショウですね。これは引き振袖には珍しい、古代紫色を使っています。お花に、よく見たらこれ真珠が施されて、巻きついています。花のモダンさと、この日本を代表する宝石である真珠で、格式の高さをミックスして作っています。あえてお花に葉っぱを付けずに、ごちゃごちゃ感のしないスタイリッシュな1枚に仕上げていまして、これがこのシリーズの中では一番人気でした。

次に右上のチューリップの柄のものです、タイトルは、「祝福の美金香」、着物言葉は「ずっと2人で」。一見、黒地に見えるのですが、黒地の中に赤を引いているので、ちょっと温かみのある黒色になっています。ちなみに私が今日着ている着物は、この引き振袖を、袖を切って訪問着バージョンにしたものです。帯は最初に出てきた弊社のアイコンである金花宴の帯を締めています。このチューリップに関しては、デザイナーの方と葉っぱの配置で、大変苦労しまして、何度も何度も修正を重ねた、結構デザインに時間のかかった1枚です。裏話としては、チューリップの上に縦のリボン柄を引いていますので、足長効果が出せるように仕上げています。

次に、左下の桜の柄のものです、タイトルは「想いに咲く桜」、着物言葉は「失われない愛を」。これは幾何学のエミリオ・プッチ風にしています。少しジオメトリック柄で、面白い、従来の着物の桜とは違うテイストに仕上げています。

次に、右下のツバキの着物ですが、タイトル

は「大輪に咲く椿」，着物言葉は「どうか幸せな毎が続きますように」。この1枚は，アーティストの衣装やオペラの衣装など，いろんなところでアレンジされて，大変ステージ栄えする衣装になったように展開が広がった1枚です。これまでツバキは，着物の柄にほとんど使われることがなかった柄ですが，シャネルのカメラとか，シャンプーのTSUBAKIとかで人気のあるお花なので，あえて使ってみました。若い人になじみのある，ヴィトンのダミエ柄風の，でも，超古典柄の市松模様をベースにしています。あえてお花をごちゃごちゃといっぱい配置するのではなく，1輪だけぼんと中心に持つことによって，存在感が増す1枚になっています。

なぜ，着物言葉を一枚一枚に付けているかと言いますと，単にやっぱり花嫁さんが着物をレンタルして着られて，はい終わりではなくて，その着物に付いている着物言葉の思いを，作り手からのメッセージとして受け取ってもらって着てもらえたらなという思いがあるからです。

これをよく見ていただいたら分かるのですが，全部かつらは着けていません。先ほども申しましたが，文金高島田のかづら姿に抵抗があるから，和装は着たくない，ちょっと避けようという声が多いので，あえてここで洋髪を提案しました。これが，若い人に着物を着てもらえるきっかけになりました。最初は雑誌社の方に「下は着物なのに，上がかづらでないのは雑誌に載せられません」と反対されたり，揉めたりもしました。「いや，これからはこういう時代が来るから。和装に洋髪でという時代が来るから絶対やったほうがいいです。いや，私はやります」と言い合いになりながらも貫いたのが，後に，和装に洋髪スタイルのきっかけになりました。

このシリーズがきっかけで，メディアにたく

さん取り上げていただいて，婚礼業界の中では，本当に一世を風靡し，また世間の和装の婚礼衣装の再ブームの火付け役となりました。一から作るのが大変でしたが，やってよかったと，すごく達成感が味わえる企画でした。

メディアの反響が大きかったということもあり，いろんなところから，オファーをいただきました。

まず，海外でこれを披露しないかというお話をいただきました。これはニューヨークの国連大使館での1枚です。あえて引き振袖だけでランウェイで歩いているショーでは面白くない。それだったら，同じ生地からドレスにアレンジして，着物とドレスの2人を並べてランウェイを歩いたら，外国人の方にすごく親近感を持ってもらえるのではないかと思います，あえて洋装と和装を並べてランウェイで歩くという企画を提案しました。海外での展開のほかにも，高台寺などでショーも行いました。一番直近のショーは，パリのユネスコ大ホールで今年の9月に開催されました。いずれの例も，婚礼衣装を通して日本文化を世界に向けて発信したいという思いで取り組んでいます。



次に，オペラの衣装のお話です。メディアに取り上げられて，日本を代表するオペラ演出家

の栗山昌良先生という方の目に留まって、ぜひ自分のオペラの舞台の衣装を担当してくれないかというお話をいただきました。この左の写真の「椿姫」の演目の衣装が、先ほどお見せした「大輪に咲く椿」のツバキの婚礼衣装をこのようなオペラの衣装にアレンジしたものです。また「蝶々夫人」の衣装も担当させていただきました。

あれやこれやといろいろ幅広くオファーをいただくうちに、京都で川端康成原作の映画「古都」を現代版で制作する話が持ち上がりしました。私は京都生まれ京都有ち、代々京都、そして「古都」の内容は室町の呉服問屋の話。そして一人っ子の方がテーマで、主人公の母と子のストーリー。ちょうど熊谷さんにぴったりじゃない？ということでお話をいただきました。脚本の段階から携わってほしいというオファーでしたので、ロケ地のあっせんから交渉、劇中に出てくる着物の衣装のコーディネートなど、全面的にサポートさせていただきました。これはちょうど2年前に公開しましたが、話ってきたのは4年前なので、制作に約2年間かけて、みんなで温めて作った作品です。ロケ地の京町家は、私が今住んでいる家です。国の登録有形文化財になっていますので、ロケ地として使われたのです。Yuki Saito 監督は東京の方ですが、家にもストーリーがあるから、ありのままの現状を映像に残して伝えたい。修正をかけるのではなくて、ありのままを伝えたいという思いをお持ちでした。我が家の柱や床は、ぼろぼろで傷がいっぱいですが、何も手を加えずに、そのまま使っています。

劇中、約2時間の映画の中に30秒ほど、花嫁の和装の姿が出てきます。和装の婚礼衣装は、ずっとなくなることがない、結婚式を通して日本文化を世界に向けて発信したいという思いを監督に伝えると、劇中に入れていただけました。そのほか、1回見ただけではちょっと分

かりにくい部分もあるかもしれませんが、ワンシーン、ワンシーン、本当に今の京都のありのままの現状や、生活文化を全部詰め込んだ約2時間の映画になっています。少し宣伝になりますが、偶然にも明日、下鴨で、夜の6時からこの「古都」の上映会が、先着450名、入場無料でありますので、1回見たよっていう方も、もし見てないという方もあれば、ぜひ見ていただけたら、私の説明が分かると思います。DVDとかも出ていますので、「熊谷が言っていたことはそういうことや」と思って見てもらえたら嬉しいです。

ベースの着物というのは変わりませんが、幅広く仕事のオファーをいただいています。2017年に京都市のほうから、京都観光おもてなし大使に任命していただきました。今後は、京都はもちろん国内のみならず、海外にも京都の衣食住を通した生活文化を発信していきたいと考えています。

最後になりますが、着物は先ほども申しましたように、着ていると人を楽しませる力を持っていると思います。私はいつもハレの日は、必ず着物を着て出かけます。そのとき、着物を着ていて思うことは、「着物を着れば人気者」(笑)。駄じゃれのようなのですが、個人的にはこの言葉を気に入っています。私の日々の実体験から着物の魅力を少しでも多くの方に伝えていきたいと思っていますし、京都の生活文化を京町家から世界に、そして、未来に発信していきたいと思っています。以上、簡単な自己紹介でした。ありがとうございます。



平竹：どうもありがとうございました。これまで着物、ウェディング、映画など、様々にプロデュースをしてこられたお話と、それを通して京都の文化を世界に発信したいというお話でした。

先ほど、ニューヨークの街中とかを歩いておられる写真がありましたが、とってもインパクトがあるように思います。周囲からどんな声があったのでしょうか。

熊谷：もう、わかりやすく簡単に、周りの外国人の方は、「ワオ、オー」と。その一言でしたが、とにかくみんなが注目して見ていただいたので、それはすごく嬉しかったです。

平竹：先ほど、着物を着ているとパワーがあるとおっしゃっていましたが、確かに、海外に行ったときに着物を着ていてパワーがあるというのは、私もよく見かけますし、感じることです。

京都は、日本の都市の中では、着物を着ている方の比率は非常に高い、ほかの都市に比べたら圧倒的に高いなと思います。ただ、一般の生活の中でどれだけ着物があるかということで言いますと、やっぱり昔に比べたら徐々に距離ができてきているのかなと思います。普段の活動の中では、そういうことに関しても何か活動されている部分はございますか。

熊谷：いろいろやらせていただいているのですが、婚礼衣装のコーディネートは国内、国外問わず、行っています。直近ではメキシコのカンクンで、引き振袖を着て結婚式を挙げたいという方がいらしかったのでその方のコーディネートをしました。

ほかには、自分自身が着物を着て、NHK ワールドなどのテレビに出たり、パナソニックさんなどの企業の広告に出演したりしています。着

物を着ることがあれば、自分自身が雑誌、ラジオなどいろんなメディアを通して、「着物はいいですよ、ぜひ着ましょう」という良さを発信しています。

平竹：結婚のときに婚礼衣装で着られたのをきっかけに、また引き続き着られるということになるといいですね。

熊谷：そうですね。

平竹：最近街中には海外の方も含めて、レンタルの着物を着ている方が結構たくさんいらっしゃいます。市民の中でも賛成の意見もあれば、反対のご意見等、いろいろなご意見があります。そういうのは、どう感じておられますか。何となく、季節に合わないようなレンタル着物もあると思いますが（笑）。

熊谷：レンタル着物についてどう思いますかという質問は、よくいただきます。

私は、今はいいんじゃないかと思います。最初にレンタル着物が街に出てきたときには、「何やこれ」と少し戸惑う部分も多かったのですが、今は、レンタル着物というのは新しい着物のカテゴリの一つとして捉えています。

着ている人はどんな人か見てみると、外国人の方とか若い世代の人が多いです。若い世代の人は SNS 発信に強い世代なので、おそらくハッシュタグをつけて着物を発信してくれている



んですね。それも「着物」という漢字でのハッシュタグではなくて、#ハッシュタグ「KIMONO」のローマ字で表記して発信しているそうなので、さらに新しいカテゴリなんじゃないかなと思います。まず、着たいとか着ようと興味を持ってくれるのが、私はすごく嬉しいですし、興味を持って注目してもらうことが、今後につなげることには大事だと思います。ですから、今となっては、いいんじゃないかと私は思っています。

私は京都の洛中の田の字地区というゾーンに住んでいますが、自宅の徒歩5分圏内のところにレンタル着物屋さんが3軒あります。そのうちの1軒は、中国人観光客とかが観光バスでやってきて着付をするお店ですが、あとの2軒は、最近、高級な着物、洗える着物ではなくて、正絹の生地の子の着物のレンタル屋さんなので、一概にレンタルと言っても結構幅広くなっているところがあります。

あとは、衣装のレンタルというのは日本が発祥のようところがあり、欧米にはない文化です。普段、例えば日本では結婚式を挙げるときに、ほとんどの方が和装衣装やウェディングドレスをレンタルされると思うのですが、そういうレンタルというカテゴリの中では、元をたどれば同じ意味ではないかと思ひます。

平竹：どうもありがとうございます。最初にお二人からお話をお聞きして、お人柄もご活動もお分かりいただけたかなと思ひますので、ここからお話を進めていきます。

これまでどのような活動をしてこられたかというお話で、基本的には歴史的な関わりのお話が多かったのですが、熊谷さんは先ほどありましたように国の登録有形文化財の家にお住まいで、それが映画のロケ地になったというお話もありました。今でもお住まいになっているのですよね？

熊谷：はい。

平竹：そのようなお住まいと生活など、暮らしとファッションについて、何か感じておられることはございますか。やはり着物を着るのに、昔の家は向いていたのではないかと思ひのですが、最近の家は突起物が多かったり、なかなか着物を着るのにはたもとが引っかかったりとか、いろいろあつたりするのかなと思ひます。

熊谷：ファッションと着物は共通するなと思ひ点があります。私が今住んでいる家は曾祖父の建てた家ですけど、曾祖父も私は会ったことがありませんし、先ほどコンテストのときのスピーチのエピソードで言ひましたように、着物も曾祖母から譲り受けました。このように会ったことのない先祖から代々受け継いで、着られたり住めたりというのが共通点だと思ひますし、そういう目に見えないものに対する



るストーリーを感じる点が一番の共通点だと思ひます。例えば、家は長い年月をかけて黒光りしているような廊下とかも、ある意味、代々受け継いできたものだと思いますし、着物も代々、形が変わらず着られるのが共通点です。未来につながる過去への敬意の表れがそういうファッションと着物に共通している点じゃないかなと私は考えています。

平竹：石関さん、主としてヨーロッパでも、暮らしとファッションの移り変わりは、暮らしの

変化があってファッションが変わってきたということでしょうか。

石関：そうですね。おっしゃるように、衣食住は緊密に関係しています。私たちの生活、ライフスタイルがどう変化していくかによってファッションも変わっていくという実感があります。例えば、18世紀のフランス貴族の婦人が着る宮廷服は極端に大きなサイズのスカートになっています。これはベルサイユ宮殿のような大きな間口と高い天井を持った建物じゃなければ入れませんし動くこともままならないわけです。どちらが先かわかりませんが、どういう暮らし方をしているかによって、衣服もそれに合わせて変化しますし、建物や衣服が変われば、暮らし全体も変わっていくと思います。西洋に限らず、日本でも、暮らしの洋風化と衣服の洋装化というのは深く関わっています。例えば、今のように椅子で座って生活する文化は、西洋から来ていて、洋服を着ている方が適しています。ただ、日本には家の中に和室があるお家も数多くあります。畳の上で生活するように、フローリングの床でもつついそのまま地べたに座ってしまう方も多いと思います。靴を脱いで家に入るといふ日本家屋の文化も依然残っています。そうした日本的な生活感覚がまだ残っているからかもしれません、洋服を着ることが多くなっても、和服を着るときの抵抗感が少ない。着やすいというか、まだ和服が私たちの生活の中に息づいている理由でもあるんじゃないかなと思います。

平竹：なるほど。明治のときに洋装が入ってきたときに、男性は比較的洋装が変わっていくのですが、女性はずっと長いこと和装が中心でした。先ほどご説明いただいたように、洋装のほうが、その当時、コルセットで体を締めていた一方で、江戸時代は、着物を今よりももうちょ

っとゆったり着ていたので、結局和服のほうが楽だったから、女性に洋装が広まらなかったとか聞いたこともあります。そういうことで言いますと、どんどんファッションっていうのは体が楽なほうに動いていっているのかなと思いますが、そのように生活の在り方も徐々に決まりごとというよりは楽に暮らせるかという視点で動いているのではないのでしょうか。

石関：「楽に」という表現は、機能性、快適性と言い換えることができます。機能性や快適性に対する考え方は時代によって変わりますけれども、洋服は今の機能性、快適性に向かって変化してきたと言えます。以前はTP0、時と場所、目的に合わせて着物、服を着替えていました。西洋だと、昼間の衣装はデイ・ドレス、夜会の衣装はイブニングドレス、ほかにも外出するためのウォーキングドレス、旅行用のトラベルコートなど、細かな服装のマナーがありました。



デイ・ドレス 1885年頃 広川泰士撮影

日本でも洋装が始まった頃、和装と洋装を生活の中で分けて着ていて、男性は外ではスーツを着て、家に帰ると和服に着替えていました。皆さんご存知のアニメの「サザエさん」で、お父さんの波平さんは外ではスーツを着ていません。帰ってくると波平さんは和服に着替えます。

マスオさんもスーツを着ていますが、帰ると和服ではなく洋服の部屋着に着替えます。TP0に合わせて着ていますが、世代によっても少しずつ着方が変わっていくのがお分かりいただけると思います。

平竹：ありがとうございます。そういうことで言いますと、熊谷さん、着物のほうでも、椅子が増えるなど生活が変わってきたことによって着物の在り方が変わることはありますか。

熊谷：和室が減ってきているので、私も普段は洋装を着ます。着物は着つけも大変ですし、後片づけも大変なので、それは洋装のほうがいいなっているのが正直な意見です。

会場：(笑)

熊谷：でも、着物っていうのは何年たっても何十年、ましてや何百年たっても着られるのが魅力だと思いますし、そういう面で見たら着物のほうがコスパが良いんじゃないかと感じます。

平竹：暮らしの文化とか生活文化、衣食住の話が出ていましたけれど、文化庁の定義で言いますと、お茶とかお花などが生活文化とされています。そういった文化には着物や畳の部屋が欠かせません。私は、着物を振興していくには、そういった日本の文化を一体的に振興していくのが良いのではないかと考えています。そのあたりについて、着物のプロデュースをされているお立場で何か思われることってありますか。

熊谷：着物のように代々着て、世代を越えて残して愛されるもの、これがやっぱりほんまものの定義だと思いますし、ほんまもんこそが文化だと私は思います。時を越えて残されて、みん

なから愛されるもの、それがほんまもので、生活文化とそういう深い関係がその裏側ではあると思います。

平竹：そうですね。お茶とかのお道具にしても、世代を越えて伝わっていくようなものが値打ちがある、ということに近いということでしょうか。

熊谷：はい。

平竹：そうしますと、食べるという食文化についても、やっぱり衣装と何か関わりはあるのでしょうか。

石関：もちろんあります。例えば和食、懐石料理を食べに行くとしします。料理屋は懐石料理に相応しい場所、しつらえになっています。そこにどういった服装が映えるか、あるいはしっくりくるかといえ、やはり和服だと思うんです。スパンコールのきらきらしたドレスでは合わないでしょう。料理を楽しむというのは、もちろん料理自体の味もそうですけれども、同じ料理でも周りの環境によっておいしく感じる度合いは変わります。そういう衣食住全体の調和で決まっていくもの、きれいさ、美しさがあると思っています。

反対に西洋の例で考えると、何度も古い話になりますが、18世紀の貴族文化では、男性も女性と一緒に衣装が豪華絢爛です。それによって自分たちに財力がある、権力があるというのを見せびらかす。食事にもその考え方が強く表れています。18世紀のフランス料理は今のイメージと違って、いろんなものをたくさん食べきれなくなるほど盛っているほうがすばらしい。王室では、生活スタイル自体が、もう皆さんに見せびらかすかたちになります。朝起きてから、着替え、食事、昼や夜の着替え、就寝、そうい

ったことが儀式として衆目の前で行われます。近しい人、親しい人に限るか、あるいはもっと多数の人に見せるか。そういうかたちで見せびらかすことが、服、食事、調度品、生活全般に及んでいました。

平竹：ありがとうございます。石関さん、例えば和装について、洋装をずっと研究しておられる立場から、何か感じてられることや、思われること、あるいはこのようになったら良いのではないかとと思われることはありますか。

石関：和服はまだまだ日常生活で着る場面があります。少なくなってきたとはいえ、着ている人は多数いらっしゃいますし、和服を着ていることに対して、周囲の人もほとんど違和感を持っていません。しっかりと生活の中に溶け込んでいると思います。こうした状況というのは、多分世界でも珍しいでしょう。ほかの民族衣装を考えても、現地の生活に対して密着度が強いのは、多分着物だけなんじゃないかなと感じています。その理由はまさに、衣食住の関係性だと思います。日本人、特に京都の人は、和服も含めた日本の生活文化をしっかりと伝え育んでいることに誇りを持っていると思いますね。そういう下地があるからこそ、着物のデザインやモチーフ、生地などが今でもファッションに頻繁に取り込まれているわけです。そのような流れを考えると、まだまだ、これからもずっと残っていくだろうし、残していかなければ



いけないと思います。

平竹：ありがとうございます。私も仕事で韓国に行ったときに、向こうの女子大生の人が通訳で来てくださって話をしたことがあります。彼女は「日本に旅行してびっくりした」と言っていました。なぜかと言いますと、彼女は当時学生ですから20歳過ぎでしょうが、日本ではチマチゴリを着ている在日の方コリアンの方がいらっしゃるが、向こうではいまだ一回も着たことがない、着ているのも見たことがないからということでした。そういう意味では、今おっしゃいましたように、日本の中ではやっぱり着物は随分と着られていることがあると思います。

石関さんがおっしゃいました衣食住を育むということ熊谷さんが今、中心的になさっている。とりわけ、着物を育んでいらっしゃると思いますが、そういう中で、例えば洋装とのすみ分けとか、その兼ね合いなど、お感じになっていることはありますか。あるいは、もう少し和装のことはこのように振興していきたいという思いはありますか。

熊谷：個人的には、着物はハレの日、気持ちも晴れになるハレの日に着るという使い分けをしています。先ほど、石関さんのお話にあったように、私の亡くなった祖父も外ではずっと洋服を着ていても、家に帰ったら着物を着て毎日を過ごしていました。でも、今の生活文化ではお洋服のほうが適しているなと思います。

平竹：実は、私の父も昭和2年生まれだったんですけれど、私が子どもの頃は、サラリーマンだったので仕事はスーツで、家に帰ってきたら着物を着ていました。けれど、ある一定年齢以上になってからは家に帰ってきたらジャージを着ていました。

会場：(笑)

平竹：きっとこっちのほうが楽だったのだろうなというのが、私の感想です。

今までは、そういった着る側とかそれをプロデュースされる側のお話だったんですけど、例えば和裁とか洋裁ということと言いますと、お二人は、和裁・洋裁をなさったり、自分で作られたりされますか。

石関：しません。

平竹：そういうことはないですか (笑)。

石関：お話の流れとしては、実はこのジャケットを作ったんですよ、と言えれば…。

平竹：カッコいいですね。

石関：すごくカッコよかったんですけど。すみません、普通に買っております (笑)。

会場：(笑)

平竹：失礼しました (笑)。

石関：いえいえ。

平竹：そうしますと、これまでは過去から振り返って現在までのお話でしたが、では、これからどのように変わっていくのか、これから先がどうなるのか伺いたします。

簡単にお話いただくのも難しいのかもしれませんが、現在のファッションのトレンドは、どのように理解したらよいでしょうか。まず、石関さん、お願いいたします。

石関：今年の流行とか、この秋冬は何がおすすめ

めか、という話はファッション雑誌やネットニュースに譲りまして、より全体的な流れ、動きの中で言うと、やはり快適性、機能が重視されるようになっていきます。朝昼晩、TP0 で着替えることはほとんどしなくなりました。着替えることが少なくなっていくと、1 着の服、ひとつのスタイルでさまざまな TP0 に合わせられるようになりました。アクセサリを変えたり、1 枚脱いだり着たりすることで、華やかに見えたり、普段着に見えたりする、そういう服や着こなしが増えていっていると思います。

もう一つは、男性、女性という区別が少なくなってきたと思います。例えば、女性がズボンをはく、パンツスタイルのものを身に付けるというのも、西洋的な流れでいくと昔はタブーだった。だけれども、女性もパンツスタイルでしっかりと歩くこともできるし、逆に、例えばスカートの丈も今までは足を全部隠すロングスカートだったのがミニスカートになって、足も見せる。見せても変だと思われないかたちになってきています。

他にも、以前は服装ごとにそれぞれ用途や階級差がある時代がありました。例えばジーンズは、昔は労働者の服でした。それがファッションとしてはくことが認められるようになったのですが、私が子供や学生の頃には、まだすごくカジュアルなものに思われていた。ですが今、それなりにフォーマルな場でもジーンズにジャケットで OK だったりします。ジーンズにジャケットという組み合わせ自体なかったはずなのに、今や誰も変だと思いません。

そういうふうな、ある歴史を持っていたものが、その文脈から離れることによって新しい組み合わせが生まれていく。そうしたことが起きていると思います。

平竹：ありがとうございます。和装について、熊谷さんは、ある意味でトレンドを作っておら

れる側にもいらっしゃると思うんですけど、どういう要素で新しいデザインをしようとか、あるいはこういうトレンドなので、和装ではこういうふうにしていこうということを考えてプロデュースされているのか、教えていただけますか。

熊谷：まず、和装のトレンド、流行としては、先ほども話に出てきましたけど、着物は常着ではなくて、晴れ着的利用、例えば誰かの結婚式に呼ばれましたとか、パーティに行きますとか、そういう晴れ着のときに着る。もしくは、レンタル着物というのが、大まかな二つのトレンドだと思います。お茶のお稽古とか、そういう和のお稽古事のときも、やはり着物を着ている人は年々減ってきているように思います。

晴れ着に着るというのは、自分の実体験ですと、船のクルーズ旅行でドレスコードがあったときに、着物を着たり、自分の好きなアイドルとか俳優さんのディナーショーに行くときに着物を着たりですとか、やはり自分の「ここぞ」というときの勝負服的な利用が今のトレンドだと思います。ディナーショーとかですと、男性も着物で来ている方もいらっしゃるので、こういう「ここぞ」というときの勝負服で使うのも一つの今の着物のトレンドではないかと思っています。

柄行きの流行的には、レンタル着物はすごく派手な原色のキッチュなものが多く、一方、晴れ着のときに着るのは、やはり昔ながらの古典柄が流行ではないかなと思います。

平竹：そういうのは、女性でも同年代の方にはたくさんいらっしゃるのですか。

熊谷：そうですね。私の周りは着物女子が結構多いので、普段国内旅行行くときも、着物を着ていくとか、中には1年363日ぐらい着物

っていう人もいます。一人一人がそういう着物をいろんな場所で発信してくれて、それはすごく嬉しいなと思います。

平竹：そういう和装もどうしても生活の変化の影響を受けるとは思いますが、和装の文化をずっと未来に向けて引き継ぐ、それをずっと次の世代に受け継いでいくにはどうしたらいいと思っておられますか。

熊谷：まず何よりも、今着ることが私は大切だと思います。着ないと何も始まらないですし、人にも知ってもらえないですし、注目も得られないので、まず今着ることが大事だと思います。先ほども申しましたが、やっぱり着物は人を楽しませたり、人を笑顔にしたりするパワーや季節の先取りとか、そういういろいろ楽しむパワーを持っていると思います。和装に限らず言えることなんですけれど、伝統を守るということは時代に応じて変わっていかないといけないと思うので、時代に合った和装を今後は展開していきますか、提案していきたいなとは思っています。

平竹：多いに期待させていただきたいと思います。

石関さんは、ずっとファッションを研究され、洋装のご研究が中心でいらっしゃいますが、日本の生活文化という意味で言うと、和装も非常に大事なものだと思うのですが、受け継いでいくにはどういうことをしていったらいいと思われませんか。

石関：先ほどのトレンドの話をちょっと補足する感じになりますが、和装においても、先ほどのジーンズの話のように役目や機能を変えていくことがあっていいのではないのでしょうか。熊谷さんのお話でも、婚礼衣装は日本髪に結わ

なければいけないというイメージを崩して今のライフスタイルと合わせた婚礼の装いの提案をされていました。ちょっとしたルールを変えていくことも必要になってくるでしょう。

それと、デザインでも、格子柄をルイ・ヴィトンのダミエ柄に関連付けたり、ツバキをシャネルのカメリアにみたてたり、和柄に対するイメージを一旦脇に置いて、現代に合う柄を考えて組み合わせることが求められていくでしょう。そのような試行錯誤というか、積み重ねから次の文化が生まれていくと思います。

また、日本には織物の伝統的な産地が各地にあります。産地は、洋装にしろ、和装にしろ、重要な生地を作る場所で、京都は言わずもがな、例えば尾州では毛織物、同じ関西の播州では綿織物、というようにそれぞれの地域の特徴があります。

西陣織等の京都の伝統産業は、織り、染め、プリントと、もともと和装用から始まっていますが、洋服と結びつくことも多々あります。例えば、matohu という日本のファッション・ブランドは、デザイナーさん自身が着物を着ていて、着物を着た時の身体感覚をどうにか洋服でも経験できないか、という思いをブランドのテーマにしています。西陣の引箔や螺鈿を使った織物で服を作れないかと、洋服向けの生地を京都の職人さんに依頼して作ってもらったり、伝統産業とファッションを結びつけたりしながら新しいものを作っていこうとしています。そういった産地、あるいは衣服産業全体と衣食住やファッションの関わりは密接で、その関係をしっかりと考えていくことは非常に重要だと思います。服や服資材を作る場所がしっかりと育まれていく、保護までいかないまでも、後々まで伝わっていくことができれば、そこから新しい文化が生まれる可能性は大いにあります。

平竹：ありがとうございます。文化庁が移転す

るということで、どういう政策を期待するかという話にも関係するお話だと思うのですが、やはり伝統産業とファッション、また作っているところを育てていくという、そういう政策的なことが必要である。現状でそれが失われていているというわけではないのですが、将来のことを考えるとやはりそれが必要だというお話でした。

熊谷さんは先ほど、今大切なのは今着ることだとおっしゃっていましたが、さらに何かそこをもう少しつけ加えていただいて、和装を振興していくにはどんなことが必要だと思われますか。

熊谷：まずは先ほども申しましたが、まず今着ること。一人でも多くの人が着ることをしてほしいと私は強く願っていますし、私が普段着ることによって、私も着てみたいなと思ってもらえるきっかけ作りをできたらいいと思います。単に文化財的要素で守るっていう体制になるのではなくて、今の時代に合った着方とか方法で和装と親しんでもらうのが私の願いです。

平竹：「着物文化を世界遺産へ」という動きもありますが、その活動には関わっておられますか。

熊谷：直接的には関与してないのですが、いろんなところで話題が出てきますし、ぜひ、この「和装を世界遺産へ」というのは実現してほしいと思います。

平竹：ぜひ、熊谷さんのお力をお貸しいただけたらと思います。

そろそろ時間になってまいりましたが、最後に何か一言ずつお願いいたします。

石関：私の財団の活動は、美術館、そして文化庁との関わりが強いので、今回のテーマに即して言えば、今までの文化政策から衣食住が抜け落ちている部分があるのは、やはり歯がゆさを感じます。京都は着倒れの街と言われるぐらいに着ることに対して大変意識や理解度の高い場所ですから、そこに文化庁が移転することで、よりしっかりと着ることの大切さを分かっていたく、そして文化庁の方からも発信して、盛り上げていただけたらと思います。

そこにはやはり産業との結びつきがどうしても必要となってきます。文化庁だけでカバーするは無理で、経済産業省など関連する省庁と連携を進める、その中核に文化庁が入ってくると、文化が中心にあって、そこからさまざまな産業が育まれていくという流れができると期待しています。



平竹：今日のシンポジウムに即したまとめをいただきました。ありがとうございます。

熊谷さん、いかがですか。

熊谷：私は和装を文化財とか保護の対象にするのではなくて、現代の文化に即した現代の文化として振興して、着物を通して京都が文化の都になればいいなと思っています。着物というのは日本の最強のものだと私は確信しているので、先ほどもちょっと話にありましたけれど、「和装を世界遺産へ」というのは本当に実現してほしいです。

平竹：大変力強いお話で非常に感銘を受けました。本当に時間のたつのは早いもので、そろそろ予定の時間がまいりました。本当にお二人とも、どうもありがとうございました。

熊谷：ありがとうございました。

石関：ありがとうございました。

平竹：本当にありがとうございました。文化庁移転の契機を盛り上げる講座として、今年度、生活文化の衣食住を取り上げようということで、その中の一つとして「ファッション」を取り上げさせていただきました。お二人からはこれまでの実践を踏まえた大変貴重なお話を伺うことができましたし、やはりお二人とも将来に向けていろんな展望も持っておられることも分かりました。

熊谷さん、先ほどちょっとお話もございましたが、明日、プロデュースされた「古都」が下鴨のほうであるのですか。

熊谷：下鴨にある京都府立京都学・歴彩館大ホールというコンサートホールの南隣です。5時半開場、6時スタート、定員450名先着順で、事前申込みは不要、入場料は無料になっていますので、この機会にぜひ見ていただけたらと思います。

平竹：石関さんは来年京都国立近代美術館で展覧会を企画なさっているということでしたね。

石関：そうですね。

平竹：お二人ともいろんなかたちでご活躍しておられますし、またこの場ではない違った場でもお二人のご活躍を目の当たりにされること

もあると思いますので、ぜひ応援をよろしくお
願いいたします。本当にどうもお二人、お忙し
い中長時間にわたりましてどうもありがとう
ございました。

会場：(拍手)